

緑の怪物

ジェラール・ド・ネルヴァル

目次

緑の怪物　Le Monstre vert

ジェラール・ド・ネルヴァル　Gérard de Nerval

高野敦志　訳

悪魔の館（やかた）

I

昔、「ヴォヴェールの悪魔」と呼ばれた、パリの最も古い住人の一人についてお話ししよう。そこから、「ヴォヴェールの

悪魔のところだ！（とんでもなく遠いところだ）」とか「ヴォヴェールの悪魔のところに行っちまえ！（とっとと失せろ）」といった慣用句が生まれた。つまり「シャンゼリゼ（あの世）に逝（い）っちまえ！」ということである。

　門番たちは普通、非常に遠い場所を指して、「蛆虫（ヴェール）の悪魔のところへだ！」と言う。頼まれた用事には、手間賃をはずんでもらわねば困るという意味である。しかし、それはパリの人々には馴染みの他の言い方と同様に、さらに誤った崩れた言い回しなのである。

　ヴォヴェールの悪魔は、何世紀もの間住み着いた、紛れもないパリの住人である。ソヴァル、フェリビヤン、サント＝フォワ、デュロールといった歴史家が、長々と濫行（らんぎょう）について語っ

たところを信用すれば、の話ではあるが。
その悪魔は最初、ヴォヴェールの館に住んでいたようである。そこはリュクサンブールの外れ、天文台の並木道の向かい、アンフェール（地獄）通りにあり、今ではラ・シャルトルーズの陽気な舞踏場が建っている場所である。
その館は不吉な評判があり、一部が取り壊されて、廃墟はシャルトルー会修道院の付属となった。その修道院で対立教皇[*一]ブノワ十三世の甥に当たるジャン・ド・ラ・リューヌが、一四

*一　対立派によって立てられた教皇で、現在のカトリック教会からは正式の教皇と認められていない。

一四年に亡くなった。ジャン・ド・ラ・リューヌは、ある悪魔との関係を疑われていた。それはヴォヴェールの古い館に取り憑いた霊だったらしい。封建時代の建造物には、ご存じの通り、それ固有の霊がいたのである。
歴史家はこの興味深い側面に関しては、正確なことは何も伝えていない。
ヴォヴェールの悪魔はルイ十三世の時代に、ふたたび人々の口の端（は）に上るようになった。
古い修道院の残骸で作られた一軒家から、かなり長い間、夜な夜な大きな音が聞こえた。持ち主は何年も不在のままだった。

それが隣人をひどく怖がらせた。治安代官*二に通報すると、一捕吏（ほり）を数名送ってきた。

　グラスのカチカチいう音に交じって、けたたましい笑いを耳にした兵士たちは、どれほど魂消（たまげ）たことだろう。贋金（にせがね）造りが酒盛りしているのかと、最初人々は思い込んだ。騒がしさから一味の人数を想定し、増援を求めに行った。

　しかし、一隊では十分ではないという判断が、またもや下された。捕役（とりやく）は誰一人として、配下らを一巣窟（そうくつ）に誘導しようとはしなかった。そこからは一軍勢の喧噪（けんそう）が聞こえるようだった。ようやく、朝方になって、十分な兵力が到着した。家の中に突入したが、何も見つからなかった。

　太陽が闇を追い払ったのである。

　日がな一日、捜索は行われた。どうやら音は、この地区の下にあるとされる地下墓地（カタコンベ）からするらしかった。

　突入する準備をしていたが、捕方（とりかた）が手筈（てはず）を整えている間に、日が暮れてしまい、またもや音はかつてない激しさで鳴り出した。

　今度は誰も下りていこうとはしなかった。穴倉には酒の瓶しかないのは明らかで、瓶を踊らせているのは悪魔に違いなかったからである。

*二　封建時代のフランスでは警察と裁判所が未分化であり、治安や司法を司る役職は王の代理官として機能していた。本訳では、こうした官職を便宜上「代官」と訳した。

通りの周辺を警固するにとどめ、聖職者に祈りを求めて事足れりとした。

聖職者がたくさん祈祷を行い、聖水が穴倉の換気窓から注入器で流し込まれた。

音は執拗に続いていた。

Ⅱ

捕役

一週間もの間、パリの民衆は郊外の周辺に押し寄せ、おびえながらも情報を求めていた。

ついに、ほかの者より勇敢な代官所の捕役が、自分が死亡した場合にマルゴという縫子(ぬいこ)に年金が支給されることを条件に、呪われた穴倉に入ることを申し出た。

男は勇ましく、うぶと言うよりほれっぽかった。男が熱愛していたその縫子は、身なりはよかったが、締まり屋で、ちょっとけちだった。財産のないただの捕役とは夫婦(めおと)になる気などなかった。

しかし、年金が手に入れば、捕役は別人になるに違いなかった。

こうした見通しに勇気づけられ、捕役は「神も悪魔も信じない。この騒ぎを収めてみせるぞ」と叫んだ。

「じゃあ、いったい何を信じるんだい」と同僚の一人が言った。

「オレが信じるのは、刑事代官殿とパリ代官殿だ」
それはちょっと言葉が過ぎた。
捕役は歯に剣をくわえ、両手にピストルを持つと、無謀にも階段を下りていった。
穴倉の底に踏み込むと、とんでもない光景が待ち構えていた。瓶たちは狂おしいまでのダンスに身をゆだねながら、優雅な姿を描いていた。
緑の封蝋（ふうろう）は男たちを、赤い封蝋は女たちを表していた。
瓶の棚の上にはオーケストラまで控えていた。
空の瓶は管楽器のように、割れた瓶はシンバルやトライアングルのように響き、ひび割れた瓶はバイオリンのしみ通るハーモニーを感じさせた。

征伐にとりかかる前に、数本空けていた捕役は、そこに瓶しか見えなかったので、ほっとして自分も真似して踊り出した。それから、ほろ酔い機嫌と、魅力的な光景に促された捕役は、首が長くて愛らしい、念入りに赤く封蝋された、青ざめたボルドー酒の瓶を、愛情を込めて抱き寄せた。
狂ったような笑いが四方より起こり、気を取られた捕役は手を放してしまい、瓶はバラバラに砕け散った。
ダンスはやみ、恐れおののく叫びが穴倉にくまなく響いた。流れ出たワインが血の海のように見えて、捕役は髪が逆立つのを覚えた。
ブロンドの髪をした裸の女の体が、ぐっしょりと濡れて、捕役の足下に横たわっていた。

捕役は悪魔そのものなら怖くなかったろうが、この光景を目の当たりにして恐怖に満たされた。任務について報告しなければと思い、あざ笑ったかに見えた緑の封蝋をつかんで叫んだ。

「一本はいただくからな」

数知れぬ嘲笑が捕役に応えた。

にもかかわらず、捕役は階段のところに戻って、瓶を同僚に見せるなり叫んだ。

「ここに妖精がいるぞ！　おまえらは腰抜けだ。（さらにきつい言葉を発した）中まで下りることもできなかったんだ！」

嘲りは辛辣（しんらつ）だった。捕吏たちは穴倉に突進した。割れたボルドー酒が一瓶見つかっただけで、残りはそのまま置かれていた。

捕吏たちは瓶が割れてしまった運命を嘆いたが、それから勇

気づいて、どうしても瓶を手にして上ろうとした。

捕吏たちはワインを飲むことが許された。

代官所の捕役は言った。

「オレは婚礼の日のために、自分の分は取っておくよ」

約束された年金を拒むわけにもいかず、捕役は縫子と夫婦になり……

二人は子沢山だったとお思いだろうか。

二人は子供が一人しかいなかった。

Ⅲ

続いて起こったことは……

ラ・ラペで催された婚礼の当日、捕役は例の緑の封蝋の瓶を自分と新婦の間に据え、これ見よがしにワインを二人にしか注がなかった。
瓶はセロリのごとく緑で、ワインは血のごとく赤かった。
九ヶ月後、縫子は額に赤い角が生えた、緑一色のちっちゃな怪物を生んだ。
さて、お嬢さんたち、ヴォヴェールの館があったラ・シャルトルーズへ……踊りに行ってらっしゃい。
しかし、子供は何の取り柄もないまま、図体(ずうたい)ばかりでかくなった。両親には悩みの種が二つあった。体が緑色であることと、尻尾(しっぽ)が生えてきたことである。初めは尾骶骨(びていこつ)が伸びたように見

えたが、徐々に本物の尻尾の様相を帯びてきた。
学者たちに相談したが、子供の命を危険にさらすことなく、尻尾を取り除くことはできないと告げられた。これはかなりまれな症例だが、ヘロドトスや小プリニウスに引用された例があると、学者たちは付け加えた。フーリエ[*三]の体系については、当時はまだ予見されていなかった。
肌の色に関しては、胆汁質[*四]が優勢であるせいだとされた。

*三 シャルル・フーリエ Charles Fourier（一七七二〜一八三七）は、空想的社会主義者で、人間はいずれ十五ピエ（五メートル弱）の尻尾と一つの目を持つようになるとした。

*四 古代ギリシャでは、ヒポクラテス医学以来、胆汁質の人間は短気で怒りっぽいとされた。

しかしながら、肌の余りに目立つ色合いを和らげようとして、苛性の薬剤がいくつか試された。たくさんの薬液をつけてこすると、瓶の緑色から水の緑、そして、ようやく青林檎（りんご）の色になった。一瞬、肌がすっかり白くなったかに見えたが、夕方になると元の色に戻ってしまった。

捕役と縫子は、小さな怪物の与える悲しみを慰め合うこともできず、怪物はますます手に負えない、癇癪（かんしゃく）持ちのいたずらっ子になっていった。

陰鬱な気分にとらわれたせいで、この種の人間にありがちな悪習に染まっていった。二人は酒に溺れたのである。

ただ、捕役は赤い封蝋のワインしか、妻は緑の封蝋のワインしか、決して飲もうとはしなかった。

捕役は泥酔するたびに、眠りの中で血まみれの女を見た。穴倉で瓶を割ったあとにぎょっとさせられた女の幻影を。

その女は言った。

「どうして抱き寄せたあと、私を生贄（いけにえ）に捧げたの。あなたのことを、あんなに愛していたのに」

捕役の妻が緑の封蝋の方をあおるたびに、眠っている間に、おどろおどろしき姿の巨大な悪魔が現れて言った。

「なぜ驚くんだ、オレを見て……。瓶を口にしたくせに。オレが子供の父親じゃないか」

おお、摩訶（まか）不思議！

十三歳になると、子供は姿をくらました。

両親は悲嘆に暮れて飲み続けたが、眠りを苦しめた恐ろしい

幻影が現れることは、もはやなかった。

Ⅳ

教訓

かくして捕役は不信心により、縫子は吝嗇（りんしょく）により罰せられた。

Ⅴ

緑の怪物はどうなったか。

何人（なんびと）も知ること能（あた）わず。

［原本について］

本作は一九九三年にガリマール社から刊行されたネルヴァル全集第三巻、Gérard de Nerval Œuvre complète Ⅲ を底本とした。

あとがき

十九世紀フランスの文学者で、『ファウスト』の仏訳によりゲーテ本人の賞賛を浴び、無意識の記憶をたどる技法で、プルーストの『失われた時を求めて』の先駆的作品「シルヴィ」(『火の娘たち』所収)を著し、狂気と夢の世界を記した『オーレリア』で、シュルレアリストを熱狂させながらも、生前は不遇のままパリの裏町で自殺したのは誰か?

ジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval の名前は、今ではフランス文学をやった人間なら、知らぬ者はいないはずである。亡くなったのは一八五五年だから、日本がまだ江戸時代の安政元年、列強に開国を迫られていた時期である。ずいぶん

昔の人なのだが、作品の中でとりわけ「シルヴィ」などは、現代人の心に迫るものがある。評価が高い作品の他に、狂気の詩人は不可思議な怪奇譚も残している。「緑の怪物」がそれである。実は大学二年の時にフランス語の教材として読まされたもので、ネルヴァルという詩人について、まだよく知らなかったから、全くへんてこりんな物語だと思った。それがネルヴァルとの出会いだった。内容を理解できぬまま、謎として心の中に留まっていた。

果たしてこれは、単なる怪奇譚なのだろうか。何だかこの話自体が、アルコール中毒に陥った男の幻覚で、空き家から聞こえてきた酒盛りの音や、突進した穴倉での瓶たちの舞踏会、捕役夫婦に生まれた緑の怪物に至るまで、すべてが長い長い悪夢

であって、物語の中では十数年の時間が流れているはずだが、現実には数分間に現れた幻覚に過ぎないような気がする。

　ネルヴァル自身は狂気の発作に苦しんでいたわけだから、アルコール中毒に陥らずとも、幻覚の世界に溺れていたとも言える。また、「緑の怪物」の正体とされるヴォヴェールの悪魔と、アルコール中毒にどのような関係があるかは定かではない。十九世紀当時のフランスにおいて、狂気の世界にいざなうとされていた緑の魔酒、アブサンと関わりがあるかどうかも憶測に過ぎない。

　この短編には中村真一郎訳があり、筑摩書房版『ネルヴァル全集』第四巻に収められている。小話風に敬体で訳されている

のだが、「です」「ます」で書かれた文は、どうしても間延びした感じがしてならない。かつてはフランス文学を専攻していたこともあり、短編なので自分で訳してみることにした。その際、一九九三年にガリマール社から刊行されたネルヴァル全集第三巻、Gérard de Nerval Œuvre complète Ⅲを原本とした。

二〇一四年三月二十六日

高野敦志

今回「青空文庫」に掲載するために、全面的に改訳をした。

誤訳や不適切な訳語はほとんどなくなったと思われる。物語の舞台がフランス革命以前のパリであり、警察と軍隊が未分離の王政時代の官職名にどんな訳語をつけるかに難渋した。江戸時代の役職名を参考にしながら、捕物帳の雰囲気が出過ぎないように調整した。

高野敦志

二〇二六年七月二十三日